

保存版 巨匠・小澤征爾、88年の軌跡

ニュースウィーク日本版

定価510円

Newsweek

世界が愛した 小澤征爾

Seiji Ozawa

1935-2024

独占インタビュー 佐渡裕 / イツァーク・パールマン

ボストン交響楽団を指揮する小澤(1996年4月4日)

2024
3・5

Special Report

TRIBUTE

追悼

類いまれな情熱と挑戦する心で
世界の名門オーケストラを率いた
小澤征爾はクラシック界に
新たな風を吹き込んだ

ジェームス・オストライチ
(クラシック音楽評論家)

20

世紀後半の西洋のクラシック音楽界に旋風を巻き起こし、1973年から29年の長きにわたり名門ボストン交響楽団を率いた情熱の指揮者・小澤征爾が2月6日、東京の自宅で死去した。死因は心不全。88歳だった。

2010年に食道癌を公表して以来、小澤はさまざまな健康上の問題と闘ってきた。食道全摘手術後の体力回復は思わしくなく、長年の立ち仕事で痛めた腰の状態も悪化していた。大動脈弁狭窄症で入院を余儀なくされたこともある。

小澤は過去半世紀にわたってクラシック音楽の世界を激変させた立役

者であり、その変化を体現する傑出した音楽家でもあった。小澤の後を追って東アジアの多くの音楽家が西洋に渡り、韓国や日本、中国に戻ってからは西洋のクラシック音楽の極意を広めることに努めた。

当時はまだ、いくらアジアの音楽家が頑張っても西洋音楽の技術に身について、原曲の深い解釈や情緒的な部分への感情移入はできるはずがないという偏見が識者の間にもあった。しかし不屈の小澤はその強烈な個性と音楽家魂、そして多大な努力によって壁を乗り越えた。

End of a Transformative Legend

世界が愛したオザワの軌跡

豊かな黒髪と永遠の少年のような雰囲気、そして尽きることのないエネルギーで、小澤はたちまち音楽ファンのハートをつかんだ。まだ30代だった1973年にボストン交響楽団の音楽監督に指名され、アメリカを代表する指揮者の1人となった。記憶に残る名演は数多く、たいいてい指揮者が敬遠しがちな大曲・難曲に果敢に挑んだ姿勢も高く評価されている。

ボストン交響楽団を率いて世界中でコンサートを行う一方、たくさんレコードも出した。だが02年まで続いた29年という在任期間は、彼自身にとっても楽団にとっても、ファンにとっても長すぎたと多くの人が感じた。

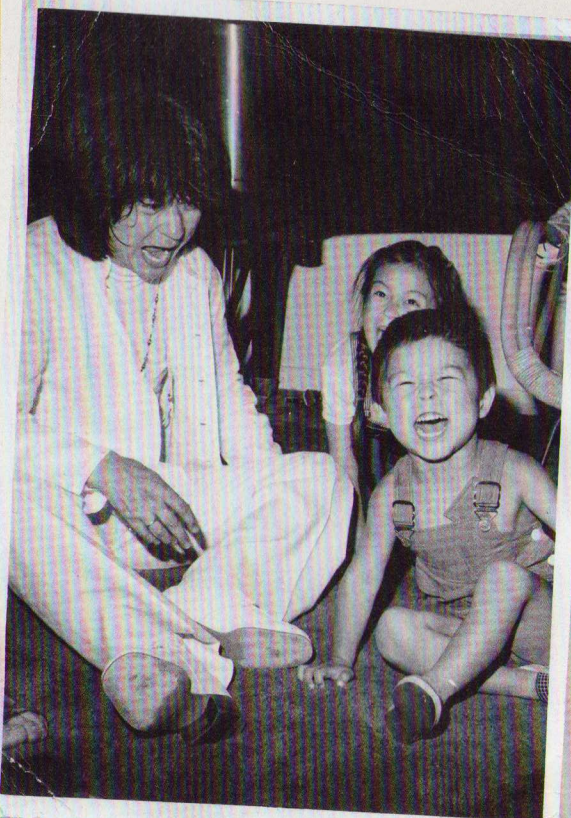
地元紙ボストン・グローブの音楽評論家リチャード・ダイヤーは小澤の退団に際し、「若き日の小澤は同世代の指揮者の誰よりも全身で音楽

音楽への情熱
ウィーン・フィル・ニュー
イヤールコンサートのリ
ハーサルで(2001年)

世界に残した大きな足跡

小澤征爾は西洋音楽の世界で活躍する東洋人の先駆けとしてだけでなく、独自の世界観で聴衆を魅了する音楽家として大きな足跡を残した

- 1935年** 中国の奉天(現・瀋陽)で生まれる。北京に転居後、41年に帰国
- 1946年** 小学校で初めてピアノに触れる
- 1948年** 成城学園中学校に入学。豊増昇にピアノを教わり始める
- 1950年** 齋藤秀雄に弟子入り。指揮法を習う
- 1959年** 桐朋学園短期大学を57年に卒業後、フランスへ游学。プザンソン国際指揮者コンクールで優勝
- 1960年** カラヤンの弟子となる。翌年、バーンスタインの下でニューヨーク・フィルハーモニックの副指揮者に
- 1962年** NHK交響楽団が客演指揮者の小澤との共演を拒否する「N響事件」が発生。以後海外が活動の中心に
- 1973年** ボストン交響楽団の音楽監督に就任。2002年まで務める
- 1978年** 中国政府の招待で北京中央楽団と共演。翌年、ボストン交響楽団を率いて米オーケストラとして初めて訪中
- 1982年** ベルリン・フィルハーモニー管弦楽団の創立100年記念公演を指揮
- 1984年** 齋藤秀雄没後10周年の記念コンサートを開催。サイトウ・キネン・オーケストラ結成へと発展
- 1992年** 国際音楽祭のサイトウ・キネン・フェスティバル松本(現在のセイジ・オザワ松本フェスティバル)を立ち上げる
- 1995年** 32年ぶりにNHK交響楽団と共演
- 2002年** ウィーン・フィルハーモニー管弦楽団のニューイヤーコンサートを日本人として初めて指揮。東洋人初のウィーン国立歌劇場音楽監督に就任
- 2024年** 2月6日、心不全のため88歳で死去



父の顔 タングルウッドで娘の征良(せいら)、息子の征悦(ゆきよし)と

を表現でき、音楽的記憶の幅広さと正確さを見せつけ、彼の前に座る演奏家のほとんどに畏敬と羨望の念を抱かせたものだ」と書き、小澤が去るときの「ボストン交響楽団は間違いなく彼の就任時よりもずっと良くなった」と付け加えている。

骨折でピアニストの夢を断念

小澤はアジアの音楽家のロールモデルだったが、自らの体験した困難については多くを語らなかった。しかし1980年にミラノのスカラ座でブッチェーニの「トスカ」を演奏した際にブーイングを浴びたときは、ある種の偏見を感じたと語っている。

「僕が出す音は、彼らの考える『トスカ』の音ではなかった。そういうことだと思ふな」と、小澤は2016年に英訳の出た作家・村上春樹との対談集(『小澤征爾さんと、音楽について話をしよう』)で語っている。「東洋人が来て『トスカ』を指揮することに、イタリア人として我慢できなかった、というのはそりゃ少しはあるでしょうね、もちろん」

オペラの経験はさほどなかったが、ボストンを去った小澤はウィーン国立歌劇場の音楽監督に就任し、2010年までその座にあった。その後はいくつもの病気に悩まされた。指揮者として再び大舞台に立つという夢は決して捨てなかったが、残念な

PHOTOGRAPH BY HEINZ WEISSENSTEIN/WHITESTONE PHOTO. COURTESY OF THE BSO ARCHIVES

がその日は来なかった。

小澤は1935年9月1日、日本占領下の満州国奉天(現・瀋陽)で小澤開作とさくらとの間に生まれた。日本には41年に帰国。ピアノを習っていたが、中学時代にラグビーで2本の指を骨折してピアニストの夢を断念。東京の桐朋学園では日本における西洋音楽の卓越した指導者である齋藤秀雄に師事し、指揮を学んだ。1959年、小澤はスクーターとギターを携え、貨物船でヨーロッパに渡り、その年にフランスで開かれたプザンソン国際指揮者コンクールで優勝した。

そのときの審査員の1人が、当時ボストン交響楽団の音楽監督だったシャルル・ミュンシュ。彼の招きで、小澤はボストン交響楽団の夏の本拠地であるマサチューセッツ州タンダールウッドで毎年開かれるパークシャール音楽祭(現・タングルウッド音楽祭)の講習に参加することになった。ここで優秀な学生指揮者に贈られるクーセビツキー賞を受賞した後、小澤はヨーロッパに戻り、ベルリンでカラヤンに師事。そこでレナード・バーンスタインの目に留まり、61年にニューヨーク・フィルハーモニックの副指揮者に起用された。これが本格的なキャリアの始まりだった。64年にはシカゴ交響楽団が毎年夏に開催するラビニア音楽祭の芸術監



した小澤に何かの縁を感じていたという。

ゲルプは小澤について、20世紀で最も影響力のあった指揮者の1人であり、クラシック音楽に新たな聴衆を呼び込んだと評価している。「類いまれなテクニクの持ち主だった」とゲルプは言う。「長髪にネックレス姿の彼は、指揮台に立つ男の美を体現していた。彼以前にああいうタイプの指揮者は世界中どこを探してもいなかったと思う」

一流演奏家たちとの確執も

ボストン交響楽団を率いた長い年月を通じて、小澤とタングルウッドの関係は徐々に疎遠になっていったが、それでも記憶に残る出来事があった。94年にはタングルウッドの敷地内に全1180席の壮大な音楽堂「セイジ・オザワ・ホール」が建設された。その総工費1000万ドルのうち200万ドルは、ソニーの社長で声楽家でもあった大賀典雄が、施設に小澤征爾の名を冠することを条件に寄付していた。

その数年後には、関係がこじれる事件もあった。既にタングルウッド音楽センターの教育活動から離れて

世界的音楽家
(左下から時計回りに)親友で共演回数も多かったチェロ奏者のムスティスラフ・ロストロポーヴィチと(2005年)／北京中央楽団との公演を終え、1万人の聴衆に花束を振る(1978年)／ミュンシュと談笑(59年頃)／ピアノを弾くバーンスタインと作曲家のアロン・コープランドと(70年代)／カラヤンと東京で(81年)



CLOCKWISE FROM TOP RIGHT: PHOTOGRAPHER UNKNOWN, COURTESY OF THE BSO ARCHIVES (2); KUNITA KAKU—GAMMA-RAPHO / GETTY IMAGES; TOSHIVUKI IZAWA—REUTERS AP / APLD

いた小澤がボストン交響楽団の音楽監督としての立場から、現場に介入したことがきっかけだった。

指揮者教育のレベル低下と、楽団員がセンターの講師として起用される機会が少ないことに小澤は不満を抱き、96年に運営の中心人物を解雇した。すると翌年、ピアノリストのレオン・フライシャーやギルバート・カリッシュを含む主要講師が抗議の意思を表明して辞任し、今の小澤には明確なビジョンがないと批判した。ボストン交響楽団に音楽監督として身を置きながらも、小澤は日本での活動を続けていた。84年には恩師の齋藤秀雄をしのび、サイトウ・キネン・オーケストラの設立に尽力。同オーケストラの設立を機に、92年には長野県松本市でサイトウ・キネン・フェスティバル松本が誕生した(2015年に「セイジ・オザワ松本フェスティバル」と改称)。

02年にはボストン交響楽団を去ったが、08年には「桂冠音楽監督」の称号を贈られてボストンに戻り、2回の公演を行っている。それが同交響楽団を指揮する最後の機会となった。

タングルウッドで最後に指揮台に立ったのは06年。10年には再び招聘されたが、健康上の理由でキャンセル。16年にも招かれたが、ヨーロッパでの演奏活動を終えて日本に戻った。

てから体力が回復せず、またもキャンセルを余儀なくされた。

世界が驚いたオペラへの挑戦

小澤が多くの人を驚かせたのは、本格的にオペラに取り組み始めたときだった。METでのオペラデビュー



永遠の少年 97年にカーネギーホールでボストン交響楽団を指揮する小澤。同交響楽団での指揮は08年が最後となった

的に活動。あえて定番のレパトリイを避け、マイナーな作品を好んだ。そうして最初に大成功を収めたのが03年、エルンスト・クルシエネクによるドイツ・ワイマール共和国時代のジャズ風オペラ「ジョニーは演奏する」の新演出だった。

小澤はウィーン国立歌劇場の精鋭を集めたウィーン・フィルハーモニー管弦楽団も指揮し、04年には米カーネギーホールで公演を行っていた。そして10、11年に予定されたカーネギー凱旋公演は、ある意味で小澤のキャリアの集大成となるはずだった。

た。ニューヨークで開催された日本芸術祭「ジャパンNYC」の芸術監督に任じられた小澤は10年12月にカーネギーホールで、サイトウ・キネン・オーケストラを率いて3度の公演を行う予定だった。しかし椎間板ヘルニアの悪化のためプログラムは縮小された。

それでも小澤は若々しいエネルギーを失っておらず、ベンジャミン・ブリテン作曲の壮大にして感動的な「戦争レクイエム」を熱く指揮。ニューヨークで指揮をしたのはこれが最後だ。翌11年4月にはカーネギーホールで「小澤征爾音楽塾」のオーケストラを指揮する予定だったが、こちらは中止に追い込まれた。

16年4月には、ささやかながらも国際舞台への復帰を果たし、ベルリン・フィルを指揮した。パリでも「小澤征爾スイス国際アカデミー」による公演を行った。最後の渡米は15年12月。このときバラク・オバマ大統領からケネディ・センター名誉賞を授与されている。

晩年の小澤はほとんど悟りの境地に達していた。村上春樹との対談でも、年を取ると演奏に「味が出てくる」と語っている。現役ばりばりの頃より「かえって面白い」と。**【N】**(筆者は米ニューヨーク・タイムズ紙で長年にわたりクラシック音楽批評を担当した)

CHANG W. LEE: THE NEW YORK TIMES

BILL BRETT: THE BOSTON GLOBE / GETTY IMAGES



ボストンを変えた日本人

アメリカ、レッドソックスの熱狂的なファンで
誰にでも心を開いた気さくな指揮者が成し遂げたこと

グレン・カール

(本誌コラムニスト、元CIA工員)

野球好き

独立記念日にレッドソックスの往年の名打者ヤストレムスキーと並んで(1999年)

小

澤征爾の訃報を受け、深い悲しみに沈む今のボストンは、1973年に小澤がこの街の誇るボストン交響楽団の新任音楽監督として乗り込んだ当時とは、まるで趣を異にする。筆者が生まれ育ったこの街の人々は、小澤を愛した。ハッピーで自由気まま、あふれる活力でこの街を包んだ小澤を……。

地元の大リーグ球団ボストン・レッドソックスの熱狂的なファンで、7月4日の独立記念日に行われる無料コンサートでは、球団のユニフォームを着て、往年の名打者カール・ヤストレムスキーと並んでお祭り気分を盛り上げた小澤。そんな指揮者をこの街の人たちが好きにならないわけがない。だがそれ以上に、小澤にはボストンっ子に愛される理由があった。彼はこの街を変えたのだ。それも人々の理想に近い形に。

小澤はボストン文化の堅苦しい一面にとらわれず、持ち前の温かな人柄とほとぼしる情熱で人々に接し、この街に溶け込んだ。相手が誰だろうと——ボストンの高級住宅地ビーコンヒルに住む気取ったプロテスタントだろうと、市南部の労働者地区出身のアイルランド系カトリック教徒だろうと、彼は意に介さない。いつだってオープンマインド。古い因縁や慣習などお構いなしだ。



人には分からない、と。の偉大な巨匠、つまり白人の巨匠の音楽はアジア

た小澤を人々は決して忘れない。N



変わらぬ情熱 (上)修業時代の1960年、ブラジル人指揮者のエリアザール・デ・カルバーリョ(右)が見守るなか、リハーサルでタングルウッド音楽センターのオーケストラを指揮／(中央)ボストン交響楽団の音楽監督就任10周年の記念公演を控えたリハーサル(82年)／(左ページ)緑豊かなタングルウッドに立つセイジ・オザワ・ホール前でクラシックを楽しむ人々

種暴動が起き、街の一部が炎に包まれた。当時の若者、つまり46〜64年生まれの子ビーム世代はあらゆる慣習に異議を唱え、公民権運動やフェミニズム運動の旗を振った。そして大企業の経営陣や大学当局、さらには音楽の殿堂の守り手たちまで、あらゆる権威にノーを突き付けた。

だが小澤の時代には、そんな偏見はもはや通用しなかった。小澤は彼の師匠の1人、指揮者レナード・バースタインがニューヨークでやってのけたように、クラシックをボストンの「新しい」聴衆に親しまれる音楽にした。ニューヨークとボストンだけでない。小澤とバースタインは世界中でそれを実現した。

ボストン交響楽団は古いボストンの一部、高尚な趣味と富の要塞の仲間

で、生きる喜びを全身にあふれさせながら、この偉業を成し遂げた。彼は地元の住民の誰にも負けない筋金入りのレッドソックス・ファンだった。球団のキャップをかぶり、学校を訪れて子供たちの合唱を指揮し、若手音楽家の育成に尽力した。一部の批判をもとめず、ボストンの西のバークシャー山地にあるボストン交響楽団の夏の本拠地タングルウッドで若手を指導し、演奏経験を積み上げて技術水準を上げようと努めた。

ビーコンヒルの住民だけでなく、ボストンの全ての市民にとって、クラシック音楽がより身近なものになったのは彼のおかげだ。彼は今のボストンを、そしてアメリカを形づくった先駆者たちの1人でもある。階層の壁が崩れつつあり、多様な文化が花開き、誰もがどこにでも、そう、芸術の殿堂にも大手を振って入れる

公演は午後3時頃に始まるが、毎回お茶会が下りのステージでボストン交響楽団が演奏している最中にバルコニー席の裕福なマダムたちが1人また1人と立ち上がり、玄関ホールで待つ運転手の元へと平然と去っていく。高級ホテルでのお茶会に向かうか、自宅でお茶会を開くためだ。

「上流階級の街」ボストンに新風

FROM RIGHT: PHOTOGRAPH BY HEINZ WEISSENSTEIN/WHITESTONE PHOTO, COURTESY OF THE BSO ARCHIVES; BETTMANN, GETTY IMAGES

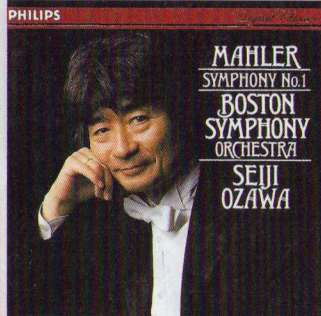
HILARY SCOTT, COURTESY OF THE BSO (LEFT)

マーラー作曲
『交響曲第1番《巨人》』

ボストン交響楽団
(1987年録音)

小澤がマーラーへの愛を育んだのは、1961年にレナード・バーンスタインの下でニューヨーク・フィルハーモニックの副指揮者に就任してからのこと。当時バーンスタインはマーラーを世に

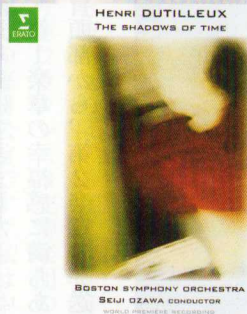
知らしめようと、アメリカであまり演奏される機会がなかったその作品を盛んに取り上げていた。マーラーの楽譜を初めて見たときの驚きを、小澤はこう表現する。「それはもう、すごいショックだったですよ。そういう音楽が存在したことすら、自分がそれまで知らなかったということが、まずショックだった」。ボストンに移った小澤はマーラーを積極的に演目に入れ、録音した。



デュティユー作曲
『時間の影』

ボストン交響楽団
(1998年録音)

表情豊かな交響楽で知られるフランスのアンリ・デュティユーをはじめ、小澤は現代の作曲家も精力的に応援した。喪失の悲しみをテーマとするデュティユーの



『時間の影』は1997年、小澤の指揮によりボストンでお披露目された。カーネギーホールで行われたニューヨーク初演に、NYTはこんな賛辞を贈っている。「今夜の演奏は聴衆に、『現代の作曲家の新作が最高の聞きどころだった』と感激して帰るようなオーケストラ公演は、ずいぶん久しぶりだろう?』と問いかけた」



Seiji Ozawa: 8 Essential Recordings 巨匠の世界に触れる名盤8選

アルバム

2月6日に死去した小澤征爾は、その指揮で絶大な力を発揮した。世界の一流コンサートホールに立ち、アジアの音楽家たちに活躍の場を切り開き、さらにチャイコフスキーの『交響曲第6番短調』などの定番から知る人ぞ知るアンリ・デュティユーの『時間の影』まで、多彩な作品をレコーディングした。公演は時に賛否が分かれたが、アルバムの多くはスタンダードとして高く評価されている。小説家村上春樹との対談集『小澤征爾さんと、音楽について話をする』（新潮文庫）で、当時70代半ばの小澤は「僕くらいの歳になってもね、やはり変わるんです」と語った。「実際の経験を通して変わっていきます。それがひょっとしたら、指揮者という職業のひとつの特徴かもしれないね。つまり(僕は)現場で変化を遂げていく」。生涯進化し続けた小澤の音楽世界に触れるには、まずこの8枚を聞いてほしい。

ハビエル・エルナンデス(ニューヨーク・タイムズ紙カルチャー担当)

フォーレ作曲
『管弦楽作品集』

ボストン交響楽団(1986年録音)

1973年にボストン交響楽団の音楽監督に就任すると、小澤は前任者の1人である指揮者シャルル・ミュンシュの影響でフランス音楽に取り組み始めた。29年にわたる在任中にラベルとドビュシーを全曲指揮し、フランス音楽の解釈を深めていった。清冽で流れるようなサウンドを紡ぎ出す才能を見つけたこのフォーレの『管弦楽作品集』など、ボストン時代のいくつかのアルバムは名作の評価を得ている。



ベルリオーズ作曲
『幻想交響曲 作品14』

サイトウ・キネン・オーケストラ
(2014年録音)

ベルリオーズの音楽には解放感があると、小澤はたびたび語った。「(ベルリオーズは)むずかしいっていうか、音楽がクレイジーだね。わけのわからないところがある。だから東洋人がやるには向いているかもしれない。こっちのやりたいことがやれる」。小澤の発案で1984年に日本で設立されたサイトウ・キネン・オーケストラの『幻想交響曲』には、そんな自由奔放なアプローチが表れている。

メシアン作曲
『アッシジの聖フランチェスコ』

パリ・オペラ座管弦楽団
(1983年録音)

小澤がオペラの演目を手がけたのは30代に入った頃だった。1965年にトロント交響楽団の音楽監督に就任して『リゴレット』を取り上げ、以降このジャンルに親しんだ。83年にパリのオペラ座で『アッシジの聖フランチェスコ』の世界初演を指揮すると、その音楽性を評論家が絶賛。ニューヨーク・タイムズ(NYT)紙のジョン・ロックウェルは「小澤は自分の持てる巨大な力を見事に制御し、その力はオーケストラピットから客席にあふれ出し、左右のバルコニー席へと高く上っていった」とたたえた。



リスト作曲
『ピアノ協奏曲第1&2番
／死の舞踏』

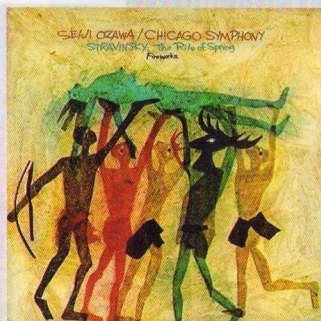
ボストン交響楽団
(1987年録音)

ボストン交響楽団時代に小澤はポーランド出身のピアニスト、クリスチャン・ツィメルマンと親交を深め、近くに家を買うよう勧めるまでになった。ツィメルマンの引っ越しは実現しなかったが、共演したリストの『ピアノ協奏曲』と『死の舞踏』では嚙みつきに激しいラプンディーを聞かせている。

ストラビンスキー作曲
『春の祭典』

シカゴ交響楽団(1968年録音)

小澤はストラビンスキーと交流があり、荒々しくミステリアスな『春の祭典』にはとりわけ強い絆を感じていた。このアルバムでは小澤の若々しくエネルギッシュな指揮に添えるように、シカゴ交響楽団が怒濤の演奏を繰り広げる。



チャイコフスキー作曲『白鳥の湖』

ボストン交響楽団(1978年録音)

小澤はバレエ音楽にも定評があった。この『白鳥の湖』ではマエストロらしく完璧にオーケストラを統率し、チャイコフスキーの代表作を優雅かつ歯切れのいい解釈で表現した。バレエ音楽への愛が高じ、プロコフィエフの『ロメオとジュリエット』やラベルの『ダフニスとクロエ』もレコーディングしている。

音楽に愛されて サイトウ・キネン・オーケストラの2010年ニューヨーク公演で喝采に應える小澤

今

年2月、小澤征爾先生の計報に接してから初めて臨む演奏会は、私が音楽監督を務めるウィーンのトーン・キュンストラ・管弦楽団による、ブルックナー作曲の「交響曲第7番」でした。

この曲は、ブルックナーが大変に尊敬していたワーグナーの体調が悪いことを知って書き進められました。

作曲中にワーグナーが亡くなると、その悲しみのなかで加筆がなされた交響曲です。

小澤先生の死後初めて指揮するのが、よりによって葬送の曲だなんて。もちろん曲目は事前に決まっていたので偶然ですが、小澤先生への思いが込み上げてきました。

第1楽章の幸福感に満ちあふれた冒頭部から、第2楽章の葬送音楽を

経て、第3楽章で宇宙的な音楽の間に挟まれるトリオは、子守歌のように美しい音楽です。安らかに眠りくださいという音楽のように聞こえてくる。やがて第4楽章の最後まで大きな一つの虹のようにつながっていく。小澤先生も縁の深いウィーン楽友協会ホールでこの曲を指揮しながら、私は先生との出会いの日々を少しづつ思い出していました。

私が小学5年生の秋、テレビ番組『オーケストラがやって来た』の放送が開始されます。山本直純さんの司会で、小澤先生率いる新日本フィルが何度となく出演していました。毎週日曜日の午後、とても楽しみにこの番組を見ていました。クラシックに夢中だった小学生にとって、小澤先生は憧れの的だったのです。初めて小澤先生が指揮する生演奏

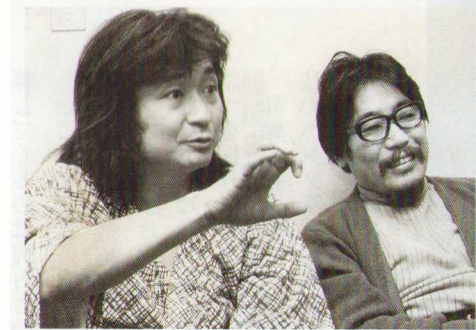


A Tribute to My Maestro 小澤先生が 教えてくれたこと

独白 師弟関係の佐渡裕だけが知る
小澤征爾の音楽に向かう姿勢

佐渡 裕 (指揮者)

京都市立芸術大学卒業。1987年、米タングルウッド音楽祭に参加。その後、故レナード・バーンスタイン、小澤征爾らに師事。1989年、新進指揮者の登竜門として権威あるブザンソン国際指揮者コンクールで優勝。2015年よりオーストリアで10年以上の歴史を持つウィーンのトーン・キュンストラ・管弦楽団の音楽監督を務め、2023年4月より新日本フィルハーモニー交響楽団第5代音楽監督に就任。テレビ番組『題名のない音楽会』の司会を2008年から7年半務めた。



「憧れ」だった (右)2009年1月、ウィーン楽友協会ホールで伝統的なウィーン・フィル舞踏会を指揮する小澤／(上)1973年、『オーケストラがやって来た』で共演する小澤と山本直純(右)

を聴いたのは、1975年6月10日。サンフランシスコ交響楽団の京都公演での来日公演です。私は中学2年生でした。指揮者は通常、舞台の手(舞台に向かって左側)から出てくるものですが、このとき長髪の小澤先生は右側から小走り出てきて指揮台に立ちました。格好はえんぴ服ではなく、森英恵さんデザインの白いジャケットにタートルネックで

分にとつて、先生はますます雲の上の存在でした。

大学を出て26歳になった私は、とにかく棒を振って飯を食っていくというのが最大の目標でした。しかし、名古屋フィルの副指揮者のオーディションに出願したものの、2度とも最後まで残って落選。そんなときに、ポストン交響楽団が夏の活動拠点にしている「タンゲルウッド音楽祭」

とはいえ、ここに集まってくるのはコンクールの優勝経験者や私より若い連中がいっぱいいる。とても最後まで残れるとは思っていませんでした。奨学金をもらえるフェローシップに入れるのは3人から4人、応

のオーディションに応募したのです。どこかで海外に出たいという気持ちと当たらないし」という軽い気持ちで書類を出したんです。しかし私は大学ではフルート専攻で、有名な指揮の先生に師事していたわけでもない。普通の方法ではとても書類選考で目に留まらないだろうと、ドボルザーク「交響曲第8番」を大阪大学の学生オーケで指揮した際のリハールのビデオを、書類に同封して送りました。

ところがこれが吉と出た。当時はビデオはまだ普及していなかったのに、タンゲルウッドの事務局長が珍しがったんですね。妙な日本人がいる、これはセイジに見せなきゃ、と思っただけなんです。小澤先生がヨーロッパから空港に着いたばかりのところへ事務局長がビデオプレーヤーを持参し、その場でそのビデオを小澤先生に見せた。それで、こいつは面白い、採ろう、ということになったようです。

楽屋で聞いた言葉に号泣

募してくるのは何百という単位です。ところが1次、2次審査とポンポンと通過し、最終審査はボストン・シンフォニー・ホールで小澤先生の前でストラビンスキーの「兵士の物語」を振りました。

頻繁に拍子が変わる曲なんです、私のハツタリをかます性格がこの大事な本番で強烈に出てしまいました。



指揮者の登竜門 1989年、プザンソン国際指揮者コンクールで優勝した佐渡。小澤は1959年に優勝

あの小澤征爾の前で指揮できるというので、楽譜を持っていらず、暗譜で振ったんです。

しかし、見事に振り間違えた。ばかだなあ、俺……と、演奏終了後、楽屋で落ち込んでいました。すると、小澤先生がフラッと楽屋に入ってきて、こうおっしゃった。「あんた、面白いっすよ」

私は不覚にも号泣してしまいました。悔しさと、うれしさの入り交じったような気持ちです。もう少し何か話をした気がしますが、その言葉以外は覚えていません。

結局最終審査に合格し、6週間にわたるキャンペーンが始まりました。小澤先生や（レナード・）バーンスタインから直接指導を受けられることになったのです。タンゲルウツドのオーケストラで練習しているところに、小澤先生が見学に来られた目のことは忘れられません。ラベルの曲だったと思う

んですが、私は一生懸命下手な英語で「ここはこうしてくれ」とか「あしてくれ」と楽団員に指示していたんですね。すると、終わってから舞台の裏にいられた小澤先生に、激しいけんまぐでこう言われました。「お前はあの指揮で音楽をさせ！」言葉ではなく、腕と身体で音楽を示せということなんです。役者じゃないんだから、しゃべる必要なんてない。練習では、無意味な話をする必要など全くない。重心を低くして、もっと低い腰の位置で指揮しなきゃいけないと。

年数と共に成熟していった

練習の後、ご自宅に誘われました。まだ15歳だった娘の征良ちゃんと一緒に、トラックのようなゴツい車に乗せられてご自宅に行きました。お茶を入れていただいて、「あんたいま何してんの？」と尋ねられました。当時、日本での私は、アマチュアの学生オーケストラや高校の吹奏楽部の指揮、あるいはママさんコーラスの指揮をいくつも掛け持ちし、多い日は一日4カ所まで振っていた。そこそこ収入はあります——そう話をしたら、小澤先生にこう一喝されました。

「あんたねえ、ばかじゃなかったらいま親のすねかじってでも勉強しなきゃ駄目でしょ。全てやめて留学しなさい」

その後、先生のアドバイスどおりウィーンに留学することになります。その前に1年弱、小澤先生が日本に帰られているときは勉強させてもらうことになりました。

新日本フィルのアシスタントコンダクターとして、オルフの「カルミナ・ブラーナ」や、コンサート形式で行われたオペラ「サロメ」などのプロジェクトに参加しました。

桐朋学園の指揮クラスを先生が教えられるときには見学させてもらいました。桐朋学園は、小澤先生の師匠である齋藤秀雄氏の指揮法の総本山です。学生たちは一生懸命齋藤メソッドで厳格に指揮棒を振る練習をしています。正直なところ、それ自体には私は興味は持てませんでした。ある日、小澤先生が「佐渡君ちょっと振ってごらん」って言われて、学生たちの前でベートーベン「交響曲第2番」の冒頭を振りました。すると先生は「おっしゃった」。

「こいつはさあ、汚い棒振るんだけど、いい音するんだよね」

もはや褒められてないのは分かっているのですが、それが自分のスタイルかなあとは思いました。

当時の私とは違って、小澤先生は指揮棒を扱うことがものすごくうまくいった。こんなにも正確にきびきびとオーケストラが仕上がるというこ

とに、アメリカでもヨーロッパでも、「小澤征爾」の登場は驚きの出来事だったと思います。

しかし小澤先生の指揮の姿は、その後大きく変化していきます。ウィーン国立歌劇場の音楽監督になられた頃から、指揮棒を持たなくなった。よくオーケストラの音を聴くようになった。あるいは、オーケストラをもっと自由に解放するようになられた。年齢と共に成熟していく過程を見てきた気がします。

最後は、オーケストラにやらせ、それを自分が聴くという境地に達したのではない。そうなってくると、オーケストラのみんなが瞬時にしてテンポを感じて、ニュアンスを感じ、というリズムとスピードが適切かを判断するようになります。

先生には指揮の技術とは別に、音楽に対する強烈な情熱がありました。嫌なこともきつとあっただろうけど、どこに行っても人を楽ませて、おちやめでいたずら好きで、いろんな文化や風習の違う国々を渡り歩いていくたくましさを持つ人でした。

最後まで挑戦を忘れなかった

かつてはN響と対立して楽団員にボイコットされるほどの衝突もありました。ぼろっと一回だけ「若い頃、自分はやっぱりつけ上がった。それはすごいショックだったけど、それは



師匠と弟子 2007年、佐渡がベルリン・ドイツ交響楽団を客演指揮した際にベルリン・フィルハーモニーの楽屋に現れた小澤

大きな勉強になった」というふうにおっしゃっていました。小澤先生に1年間指導を受けた後、私はウィーンに留学し、89年にプザンソンの指揮者コンクールで優勝し、フランスを中心に仕事を始めていくことになりました。その頃、小澤先生にこう言われました。「ヨーロッパで活動していくんだったら、ドイツ

かったら、なかなか「ヤー（はい）」とは言わないんです。でもヤーって言ったら本当に、みんな考えていたことを実行してくれる。

だからドイツのオーケストラは、ずっしりしているんだけど、なにか跳ね上がっていて、輝いている。後にベルリン・フィルでも指揮することになりましたが、小澤先生が何

のオーケストラを指揮しなさい」どんなに小さくて未熟なオーケストラでもいいから、振るなさいとおっしゃるのです。ドイツ人のオーケストラ社会というのは、1日目の練習、2日目の練習で何を、3日目の練習で何をつくってどう本番に持っていくか、そのプロセスが大事なんです。楽団員が納得していな

を伝えたかったが、今はよく分かります。

その後、留学を経て私が31歳で新日本フィルの指揮者グループの一人に選んでいただいたのも、「佐渡に指揮をやらせろ」という小澤先生の強い推薦があったからです。

新日本フィルで、私はベートーベンの第九を任されてサントリーホー

ルで練習していました。最後の本番前のリハーサルで、オーケストラがやけに緊張していて、どうもムードが違う。途中で、客席にいる誰かに合唱とオーケストラの音のバランスを聞こうと思って、指揮をしながら振り返って「バランスどおー？」って叫んだら、「オッケーです！」と大声で返事をしてくれた人がいた。なんとそれは、手で大きく丸を作った小澤先生だったんです。

こうした逸話は、先生に関わった人は誰もが持っていると思います。

小澤先生がウィーン国立歌劇場の音楽監督に就任されたのは2002年、67歳のときのことです。決して先生が得意とはいえなかったオペラという分野です。しかも先生はドイツ語はごく苦手だったはず。政治力学も渦巻く歌劇場で、オーケストラだけで200人、合唱団や熟練のスタッフや歌手や演出家と舞台をつくっていくのは、いくら小澤先生でも覚悟のいることだったでしょう。最後まで挑戦を忘れなかった小澤先生には、敬服の思いしかありません。私は昨年4月、小澤先生が約50年前に創設した新日本フィルの音楽監督に就任しました。小学生のときから憧れていた小澤先生のオーケストラを引き継ぐ——これも運命だと思っています。

現代最高峰のバイオリニストとして世界の名だたるオーケストラと共演し、ソロでも活躍してきたイツァーク・パールマン。現在78歳の彼は小澤征爾との演奏会での共演や録音機会も多かった。公私ともに小澤と長年交流のあった米在住のパールマンが、電話インタビューで故人との思い出や音楽を振り返った。

だことを覚えている。どういう経緯だったか、日本のテレビ番組「オーケストラがやって来た」で演奏した折、セイジとステージ上で卓球をしたこともあった。僕とセイジが友人ということ的前提に、僕らに変わったことをさせてみようという企画だったんだらうね。セイジの食への情熱はすごかった。



長き友情 ポストン交響楽団の100周年記念コンサートを終えステージを去るパールマン(中央)と小澤(1981年10月)

A Colorful Charisma 名演奏者が見た 小澤の遊び心と 才能の核心

回想 イツァーク・パールマンが「セイジ」との年月、共演を振り返る

きたな」とセイジが言い出して、出前を取ったこと。そんなこととして大丈夫なの、と驚いたけど、彼は平気な顔をしていたな。

そんなレベルの音楽家と共演できるのは大いなる喜びだった。そういえば彼と同じようなリズム感を持っていたのが(小澤の師匠の)レナード・バーンスタイン。2人にはどこか似たところを感じる。

セイジは単に音楽の技術だけではなくて、その技術でどんな音楽を表現したいか、確固たる信念を持っていた。それが彼の才能の核心じゃないかな。音楽家は自分の音楽で聴衆を納得させなきゃいけない。単に良い曲を演奏するだけでなく、今この瞬間はこう表現するしかないんだ、という必然性で聴く人を別世界に運ぶこと。そのために指揮者は客より前に、オーケストラを納得させる必要がある。その必然性をセイジは若い頃から生み出すことができた。

最後に会ったのは、僕が4〜5年前に日本を訪れてランチに行った時のはず。日本の音楽祭に絶対出て、としきりに口説かれたなあ。いま思い返されるのは、いつも愛らしさとポジティブさが感じられたセイジの人柄。音楽家としては、色彩豊かでファンタスティックなカリスマとして、世界中で語り継がれていくことは間違いなさだろうね。

構成・澤田知洋(本誌記者)

TED JULY—THE BOSTON GLOBE/GETTY IMAGES

©MICHIAKU OKUBO

恐らくは1960年代後半だったと思うが、フィラデルフィア管弦楽団主催のサルトガ音楽祭に関連した会合で会ったのが、初対面だと思う。セイジは人懐っこくて優しいし、すぐに打ち解けた。その後何度も共演したのはもちろんだけど、一緒にボウリングや夕食なんかも行ったり、音楽抜きで友達としてたくさん遊ん

彼をポストンに訪ねると、街一番の中華や日本食レストランに連れて行ってもらった。彼のおすすめはなんでもおいしいから、いつも店選びは任せきり。「あそこに行くぞ」とセイジが言えば、喜んでついていった。おかしかつたのが、東京の中華レストランだったと思うけど、食事をしていたら「寿司が食いたくなって

者がテンポどおりに振ることと、本当にリズム感があることは、実は別のこと。単に拍子を刻むのではなく、セイジは拍と拍の間のビートも感じ取り、演奏に生かしていた。僕が言うところの「内なるリズム」を備えていて、常に弾きたいように弾かせてくれたし、オーケストラとすごく合わせやすかった。だから

音楽にはほんとうに国境がない。音楽することの喜びをばくは感じないではいられなかった。

1961年、ニューヨークのカネギー・ホールで、ニューヨーク・フィルハーモニー交響楽団の副指揮者として黛敏郎作曲「饗宴」を指揮してデビューし、客席からの大きな拍手を聞いて(出典①)

やっぱり一番は、ロストロポーヴィチだね。

ポストン交響楽団の音楽監督を約30年務めたなかで、一番印象に残っている共演者に旧ソ連のチェロ奏者ムステイスラフ・ロストロポーヴィチを挙げて。公私共に親交があった(出典④)

オペラというのは、僕の場合、あとからやってきた、あとから手に入った宝物みたいなものなんです。

もともと縁遠かったオペラについて2011年に語って。2002年に30年近く務めたポストン交響楽団の音楽監督を退任し、ウィーン国立歌劇場の音楽監督に就いた(出典③)

日本人の感性をいかした西洋音楽の演奏というのは、もちろんもしそれが演奏として優れていればということです、それなりに存在価値のあるものだと思いたい。

日本人や東洋人が自らの心の在り方を深く理解して西洋音楽の演奏に反映させれば、独自の価値を生み出せるのではと述べて(出典③)

Pearls of Musical Wisdom 音楽への情熱を 言葉に乗せて

語録 音楽への思いや生きざまを本人が語った珠玉の言葉で振り返る



音楽はうんと個人的なもので成り立っている。

一番大事なのは、人間と音楽が根本的にどこでつながるかにあるんじゃないだろうか、と語って(出典②)

本番のときにどう振るかなんてほとんどどうでもいいんです。

「どうでもいい」と言い過ぎ」だと付け加えつつ、練習のときにオーケストラを仕込む技術が重要だと力説して(出典③)

新年好!

2002年のウィーンフィルのニューイヤーコンサートで、日本語でなく中国語で新年の挨拶をして。終生、中国との縁を大切にしたい

僕の日本に対する愛は、みそ汁に対する愛国心みたいなものだよ。

「日本」と言っていて愛しているものは何か?と問われるとき、自分が子供の頃からなじんでいた食習慣や文化的伝統、感受性や友人などの総体であり、帰巣本能みたいなものであるとして(出典②)

音楽会を三回ぐらいやめてもこいつを教えた方がいいと、思うような瞬間があるわけよ。

作曲家・武満徹との対談で、持てる時間に限りがあるなかでも教育に熱中してしまうことについて、「教育には麻薬的な魅力がある」と語って(出典②)

もう日本に戻るつもりはなかった。

NHK交響楽団にボイコットされた「N響事件」のショックがいかに大きかったかを語って(出典⑤)

もちろんうれしかった。でも「これでまだしばらくヨーロッパに居られるな」という安心の方が大きかった。

欧州遊学中で仕事が終わった24歳の時、フランスのプザンソン国際指揮者コンクールで優勝したときを振り返って(出典⑤)

何とも言えない喜びがどんどん湧き出てきた。音楽家になってよかった。

病気療養から復帰して2年ぶりに総監督を務める音楽祭「サイトウ・キネン・フェスティバル松本」で指揮をした感想を述べて(出典⑤)